



今や読図・ナビゲーション講習は登山者の間ですっかり定着した感がある。その背後には、オリエンテーリングが約半世紀にわたって蓄積してきたナビゲーション・読図スキルの体系が活かしている。そしてナビゲーションは日本をリスクに対して頑健な社会にすると思うのは私だけだろうか。

オリエンテーリングを 国体・インターハイへ

登山という種目が国体やインターハイで行われているのをご存じだろうか。

本来競技スポーツでない登山を勝ち負けの決まる競技にしているのが、登山界内部からもそのあり方については批判が少なくなかった。現在では、国体はクライミング(ロープなしで岩を登るボルダリングを含む)のみ、インターハイでは天気図の書き方や地図の読み方も含めて総合的に判定されるという種目となっているが、それでもインターハイについてはその内容についての高校顧問からの疑問も少なくない。

本来登山は、持久力と自分の判断で移動できるナビゲーション能力や岩場でも登れるクライミング力、そして自然の中での生活力、と多様なスキルから成り立っているはずだ。それなのに国体で「登山」と称して競う種目がクライミングだけでいいのだろうか？

数年前のことだが、突然そう思い立って、日本山岳協会の事務局をアポもなしに訪れて、登山種目にオリエンテーリングを入れてくれないだろうかという話を持ち込んだ。事務局長の八木原さんと事務局員の中川さんは、突然の訪問にもかかわらず、1時間近くにわたって、丁寧に僕の話聞いてくれた。

組織がそう簡単に動くわけもないが、登山者のための読図講習・講演を何度も行い、多くの参加者に支持され、一方で登山遭難中の約35%を道迷いが占めて現状を見るにつけ、オリエンテーリングを登山種目に入れるべきでしょ、という思いは強くなる。

インターハイについても同様だ。現

在の競技形態は、どんな努力が結果につながるかという競技スポーツとして本質的な部分が明確だとは思えない。ナビゲーションスキルのオリエンテーリング、持久力のトレラン、努力と結果の因果関係がはっきりしたこれらの種目こそが、高校生がそのチャンピオンを決めるインターハイにはふさわしいのではないだろうか。

その上、ナビゲーションの根底にあるスキルや考え方は、日本の学校教育の理念とも言うべき「生きる力」の育成にうってつけだ。現在の競技形態が要求する集団で協力して何かをやることももちろん大事だが、これからの社会は自律して活動できる人材をより強く求める社会である。

こうした思いつきをfacebookに書き込んだら、登山関係者を含む相当数の人から「いいね」の支持と、コメントをもらった。縦走競技で要求される読図スキルのトレーニングの一環として、オリエンテーリングに参加している事例があるというコメントもあった。

国体種目入りは、かつてオリエンテーリング界でも話題になった。それは、都道府県リレーが始まった理由の一つでもある。しかし国体スリム化が目指される現在、オリエンテーリングが単独で国体種目になることは99.9999%ないだろう(しかし、Jリーグ入りの確率について、そう言われた住友金属鉱業は鹿島アントラーズとして初代チャンピオンに輝いている)。しかも、たとえオリエンテーリングが単独で国体種目になったとしても、多くの参加人口を見込めない。それよりも関連するスポーツとしての登山とタッグを組むことで、登山は種目の透明化・競技化を図ることができると同時に、多発する道迷い遭難防止への組織としてのアピールができる。一方オリエンテーリングは、膨大な登山人口に対してその存在をアピールすることが可能になるとともに、その蓄積を社会に還元することもできる。インターハイにおいても同様だ。もちろん、このような「大改革」が一朝一夕にできるとは思えない。トップダウン的なロビイングは重要だが、草の根の動きも大事だろう。現在でもオリエンテーリング関係者が国体やインターハイ登山に関わっているケースは見受けられる。各地でトレーニングの一環としてのオリエンテーリングが選手や生徒たちに受け入れられれば、

自ずと種目採用への道は開かれていく。

今年のインターハイは新潟県苗場山周辺。筑波大学OBで、新潟で高校教員をしている笛木氏が開催の中核を担っているそうだ。覗いてみようと思う。

原発のニュースと未熟なナビゲーション(2)

1年ほど前に、学生の未熟なオリエンテーリングが日本の原発対応やその報道に似ていると書いた。道迷いの危険があるという漠然とした把握では、道迷いを防ぐことはできない。ある場所で具体的にどのような迷い方がありえ、またそれがどのようなリスクを持つかを地図から推測できてこそ、それを防ぐために読図時間を費やすべきかを決定したり、防止策を具体的に考えることができる。未熟なオリエンティアは、地図・現地ともに今見えているもの見ているものが全てで、予測的な考えに乏しい。リスクを具体的に予測しなければ、動きはもたつき、結局リスクを防ぐこともできない。

それから1年、原発の危険性も落ち着いたと同時に事故原因や対応についての報告も出されるようになった。原発の危険性についてもさんざん議論がされている。だが、その多くは「原発は危ない」といった漠然とした評価で思考停止し、どのようなリスクが高いので、どのような優先順位で対策を立てるべきなのか踏み込んでいないように思える。レベル7という希有の事故となった福島でさえ、惨事へのイベントツリーを書き出してみれば、たとえ津波が防げなかったとしても、電源車が常駐していれば冷却を続けることが可能で、事態はあそこまでひどくはならなかったと推測される。

脱原発への合意によっていずれは全ての原子炉が廃炉になるとしても、それまでには相当の年月がかかる。その間にも地震や自然災害が発生する可能性はある。「危ない」で止まってしまっただけでは、その間どうすべきかという現実的行動が生まれていない。これだけ未曾有の大災害に見舞われても、日本社会は依然リスクやそのマネジメントという考え方で危険に対処する発想を持っていないのかもしれない。

若者の間に優れたオリエンティアを輩出するための活動は、同時に日本をリスクに強い社会に変える、といったら妄想扱いされるだろうか？(村越 真)